

第7回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時：平成23年2月7日（月） 午後3時30分～5時

場所：京都ロイヤルホテル&スパ 2階 翠峰の間

出席委員（敬称略）：

村井康彦会長，池坊由紀副会長，井上八千代委員，岡田暁生委員，河瀬直美委員，
清澤悟委員，小林千洋委員，鈴木千鶴子委員，富永茂樹委員，林典子委員，平井誠一委員，
森田りえ子委員，山本容子委員，細見吉郎委員

事務局：

山岸吉和文化市民局長，内山修国民文化祭担当部長，北村康二文化芸術都市推進室担当部長
ほか

- 1 開会
- 2 京都文化芸術都市創生計画の中間点検・見直しについて
 - (1) 諮問
 - (2) 今後の進め方，スケジュール
 - (3) 取組状況報告
- 3 意見交換
別紙のとおり
- 4 閉会

(別紙) 意見交換摘録

<委員>

先程、国民文化祭という話があったが、映画がないなと思ったのが一番感じたことである。

<会長>

国民文化祭は府県単位での開催なので、府が統括してやっている。京都市はその中の一部、まあかなりの部分になるが、これを受け持つという形になる。おっしゃった御意見、これから取り入れるというのはなかなか難しい…。

<委員>

と言うのも、奈良県民文化祭も映画がない。映像文化の歴史はまだ100年くらいで、日本の伝統文化ということでもない。1年程前に京都大学で学術映像コンペティションというのがあった。大学の先生が論文を発表されるときは、以前は全部文字だったが、最近は映像で発表することもある。映像がいろんな分野で幅広く用いられてきている。伝統を継承することの中には新しいものも入ってくるが、映像がどういう形で進化していくのかな、と漠然と思っている。

最初に言われたとおり、どんな分野でも、文化というのは生きるということに非常に密接に結びついている。観ることが喜びになるとか、活気づくとか。ただ、如何せんお金がかかったり、発表する場合に、若い人たちがそれをいきなりはできないという状況があって、そういうところで前に出ていくものと、見えないけれども皆の中で育まれていくものとが、うまく融合していくといいんだろうなと思う。

<委員>

ちょっと補足させていただきたいと思う。

まず、国民文化祭では、映画関係の催しは御指摘のとおり無い。ただ、国民文化祭そのものではないが、毎年、文化庁が、メディア芸術祭を新国立美術館で実施している。またこれと同時に、その国民文化祭の開催県でもメディア芸術祭を実施するということが続いてきている。昨年、国民文化祭は岡山であったので、メディア芸術祭も岡山であったが、それとは別に京都市でも、メディア芸術祭を開きたいということを文化庁が言ってきて、マンガミュージアムと芸術センターが分担して、国民文化祭よりも少し前の9月に、映像を中心としたメディア芸術祭、マンガミュージアムではアニメを中心としたが、そういう形で事業を受けたという実績はある。そして、今年はそれこそ国民文化祭が京都で開催されるので、京都で開催してはどうかという話が出てきており、目下検討中である。

映画に直接関係ないかも知れないが、そのような動きはあるということを御承知いただけたらと思う。

<委員>

今、映画の話が出たので、京都市が考えていることを御紹介したい。先程、資料に「若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくり」というのがあったが、これは今、文化市民局がやっている事業の中で、私が特に力を入れたいと思って、去年から予算を計上してやっているものだ。たとえば、今、映画のお話なので、映画人の若い人たちが集まってくるようなそういう拠点づくりというのが考えられる。京都市は今非常に多くの学校の統合をやっている。そういう閉校の跡を一つ利用してやればいい。もう成功事例がある。芸術センターはその成功事例であるし、マンガミュージアムも非常にいい形になっている。それから堀川の音楽高

校もある。そういうのに続いて、たとえば映画、現代芸術が集まるようなところを作れないかと考えている。私は、若い方が倉庫やガレージなどを使ってアトリエをやっておられるところを2~3箇所回ったことがあるが、皆さん本当に困ってらっしゃるので、そういう人たちも閉校施設のどこかに集まってくるとか、そういうことを考えている。今、京都市では、映画祭の委員会がある。私はその委員でもあるが、映画文化を審議いただいている委員会の方にお願ひして、拠点づくりについても御協力いただこうと、これは、府ともあまりバッティングしないようにしないといけないので、一緒に協議しながらと思っている。

<委員>

国民文化祭についてだが、府知事もおっしゃったのは、国民文化祭を契機にして文化の発祥をもう一度京都から見つめ直そうということだと思ふ。映像についても、この文化祭の中でせよとも、今お話のあった京都映画祭というのがあるし、ほかにも若い方たちがインディーズ映画祭をやったりしている。映画芸術については、ノウハウを持っている太秦のプロ集団と、立命館の学生さんたちで『京都太秦恋物語』という映画を一緒に作って、これからの映画人を育てていこうとしている。確か知事にもプロデューサー役として御出演いただいたようなこともある。街の中に、映画を作るときには協力しようという、昔からの気質がきちんと入っていて、それに連動して、その中に京都の持っている古い良い伝統、そして新しいものを入れていけば、花開くところまで来ている。さらにもう一つ、国民文化祭で、要するに映画の誕生したこの街に、全国の若い人たちが集まって、たとえばショートフィルムの映像祭をやったらいいという御意見は確かにあるなと思ふが、それ以外にたくさんやっている。

京都の場合は特に盛りだくさんなので、メリハリをつけるということと言うと、京都映画祭というきちんとしたものがあるし、そちらでされているのかなと思ふ。それから昨年も、CME X及びコンテンツフェスティバルを京都でも一部やろうということがあった。映像についてはきちんとほかでされているので、何か会があれば何でもそこに入るというのではなく、国民文化祭でやるべきもの、市がやるもの、我々メディア業界がやるもの、と分けて、確かに少し心配な部分はあるが、そういうふうに進んでいるのかなと思ふ。

前回も申し上げたが、京都にはそういうものはたくさんあるが、それらをコントロールしたり、情報をきちんと発信したりできる基地がない。プロデューサーを育てるといふか、そういうことをできる機関が必要かなと思ふ。なかなかお湯をかけて3分でできるわけではないので、地道に、こういう国民文化祭をやるといふ動きの中で、じゃあプロデューサーを育てていこうとか、一つのきっかけになれば、国民文化祭の中にまた新しい流れが生まれてくるのかなと思ふ。映画づくりでは、いわゆるフィルム・オフィスとかフィルム・コミッションのようなことがあるが、同様に、文化オフィス、文化コミッションのようにしてやれば、たくさん持っている文化をきちんと発信していけるのかなと思ふ。京都にはまだまだ素晴らしいものがたくさんあるので、全国の関心を持っている人が、京都にはこんなものがあると気付いてもらえるような、そういうことを推進する、是非そういう政策を、箱ではなくて人を育ててやっていくということが創生計画の中に入れていいかなと思ふ。

<委員>

今、おっしゃられたことに関連するので少しだけ発言する。

京都文化祭典というのをずっと開催しているが、この期間に、京都市が主催している事業とか、いろんなものが一緒になって、240とか220くらいのいろんな文化イベントを網羅して発信している。このときに携帯電話とかも使いながら、京都に入った瞬間、今日は何やってるやろな、と調べると、今日の文化イベントがぱっと一覧で出るというような御紹介もし

ながら、文化祭典を整理しようと事務局で一生懸命やっている。そのとき思ったのは、京都は、別に文化祭典期間中じゃなくても1年中催しがたくさんあるので、そういったものがサービスとして提供できることが必要なんだろうなということだ。一度、京都文化祭典期間中だけでも僕らでやってみようと、エントリー事業だけで期間中にやったのだが、大変好評であった。今の御発言に合わせて、そういうものの必要性と、実際にやってみた評価ということで発言させていただいた。

<会長>

こういう見直しの場合、過去どういうことをやって、こういうことが問題だったとか、考え直さないといけないということも大事だろうと思う。たとえば文化祭典をやっておられてこういうところは問題だったということはなかったか。

<委員>

一つ思ったのは、やはり、京都はいろいろあるので、あまり一つに対して盛り上がらないことが多いようだ。なので、盛り上がりを期待する必要はないと思うのだが…。

今日は少し時間があれば発言しようと思っていたことがあるので、それも交えながらお話しする。私は、京都文化祭典連絡協議会の立場でここに座らせていただいているが、実際は商売をしているので、商売人の感覚からいくと、芸術とか芸能とかも、やっぱり観に来ていただいてお代を払っていただくという部分も必要になってくると思う。文化を継承、発展していこうとすると、それを愛好してくださる方が、対価を払って、観たり買ったりしていくことによって、それがつながっていくということがある。文化祭典をやっているでも、文化に親しむ機会を発信しているだけで、それが生活につながっていかないようなところがあって、何となく、大変失礼な言い方だが、何となく綺麗事だけをやっているような感覚がある。実際の生活とか収入とかに連動していかないことが多くて、本当は後継者を育成していくということも含めて、その次の若手たちがその技術で飯を食べていけるのかとか、そんなことも大切なんじゃないかと思って、何となく、上澄みのところだけやっているような気がして、自分の中ですごく気持ちが悪かった。

たとえば、僕は物を売っている者なので、伝統工芸のメンバーと仲がいいわけだ。で、伝統芸能とかがあって初めて伝統工芸もある、たとえば綺麗な着物も舞台があって初めて映えてくるということがある。よく産業との連動と書いてあるが、もう少し経済活動と文化も見直していてもいいんじゃないかと思う。たとえば日本は貿易依存率がすごく低い。国内需要で十分賄えてきたとは思っている。ただ、この御時世の中で、世界に市場を求めていくということは大切であり、その中に伝統芸能や文化や芸術作品も含め、そして伝統工芸も絡めて、もっと世界中に市場を求めていくこと、京都として発信していくことももっとあっていいのではないかと思う。この京都文化祭典も何となく広がりをもとめるということできると、文化に親しむ機会だけでは、壁にぶつかってしまうんじゃないかと思う。もっと、文化と経済と生活とをうまく融合して世界に発信していくきっかけの1日になればいいのにな、と思いながらやっている。その中で、プロデューサーを作っていくことも必要だが、世界の市場に売り出していくためのグローバル・ビジネス・サポート・センターのようなものが、伝統工芸や伝統芸能の世界にも必要なんじゃないか。それが、もしかしたら文化創生につながっていくんじゃないかということで、今日は、文化と経済を一つ視点に入れていただけないかなと思っていました。

<委員>

今のお話、全くそうだと思う。

今日のお話を聞いていて、まず良い連絡としては、ロームが京都会館を直すための予算取りをしてくれるという発表があった。もう一つは、文化的景観、岡崎地域を何とかしようじゃないかと。で、そうやってチラシを見ると、国民文化祭で、京都市の実行委員会が、京都会館を使うものが三つ挙げられている。全国吟詠剣詩舞道祭、吹奏楽の祭典、邦楽の祭典、この三つはすごく面白いメニューだと思う。で、京都会館を直そう、岡崎地域を文化的景観として見直していこう、そして京都会館を使った国民文化祭がありますよ、と。この辺を、それぞれのプログラム全部に力を入れなきゃいけないのだけでも、今回、京都として裏側のストーリーを考える必要があると思う。この三つ力を入れて売り込みたいとか、この辺を京都の魅力として、今後、伝えていきたいとか、京都市が作るシナリオのバランスを少しこういう審議会で考えてみてはどうかと思う。市の人がおっしゃったように、京都はいっぱいいろんなことがあって、国民文化祭が9日間行われて、歩いて観る京都だとか、文化に触れるだとか、まあよく言われるようなことがあるけれども、たださっきおっしゃっていたように、PRが少ない、PR力が足りない。そしたら、たとえば映像を使って、隠し玉として、京都会館再整備するぞ、岡崎地域景観考えるぞ、国民文化祭では京都会館使ってこの三つの項目やるよというようなことを、球のように打ちながら、バランスを変えてやると、見え方が変わってくるんじゃないかと思う。もちろんお茶や生け花も全部素晴らしいプログラムだが、敢えて京都会館と絡ませたプログラムを、力を込めてやると、違った見え方がするんじゃないかと思う。それはもう京都市からのメッセージだ。未来へ向けてのメッセージを、こういう国民文化祭を使って知らせていくという、そのためにプロデューサーがいたり、映像を使ったりというような、もう一つ具体的に何かあれば、楽しい文化祭になるんじゃないかと。つまり未来が感じられるという意味で。その辺の組み立てをされたらどうかと感じた。

<会長>

岡崎地域の活性化がテーマになると、これがある、あれがあると、盛りだくさんになってしまう。私もそういう会議で、ちょっと引き算をしてほしい、と言ったことがあるが、やっぱり優先順位というようなものが、あるいはここを突破口にして活性化していくというようなことが必要だろうと思う。資料に、平成22年10月末、これだけのことをやっているところ。これだけあったら我々にはもうどれが優先的なのか俄かには分らない。実にたくさんのことやっておられるということだと思うが。この期間はこれを重点的にやるというようなことが必要だ。あるいは、ものによっては継続ということもあるだろうが。是非そういうことを取り込んで見直しの柱の一つにしていただければと思う。

<委員>

京都会館は、私どもにとっては、今現在はあまり使いやすい劇場ではない。先程、朗報があった。朗報があっただけに、具体的整備についてもっと真剣に考えるべきで、これこそ市と府のバツティングなく、もっと専門的に、何を作りたいか、第1ホール、第2ホールをそのまま残していいのかということまで踏み込んで考えるべきだと思う。これだけのお金が出るということになったら、もう一度崩すべきではないかと思う。たとえば専門家から御意見をいただいて、2千人規模でいいのか、1万はいらぬか検討する。府の持っているもの、市の持っているもの、これを分けて考えてはもうダメやと思う。京都の中は狭いから、もう本当に走ってもすぐ行けるようなものなので、その中でもっと考えないと、どこかで行き当たる。私どもにとってはホームグラウンドである祇園を使うことはとても大変だが、皆様の御意見で、日本舞踊の祭典に歌舞練場を使うことになった。これはある種レトロな味わいのある劇場なので、使いにくいことは分かり切っているけれども、全国の舞踊関係者に来たいとおっしゃっていただいている。だから、それで可能なことを考えたいと思うが、この京都

会館のことは本当に真剣に、もう今しかない機会なので、お考えいただきたい。私どもにとって必要でないものでもいいというぐらいの気持ちだ。今、京都にとって何が必要かということ。もっと大きな1万人規模のものを一つ作るということかも知れないし、本当にオペラハウスを作るということかも知れない。それぐらいの真剣さで取り組んでいただいて、この第1、第2を残そうということを考え直されたらどうかというのが、朗報を聞いただけが一番感じている。

それから、景観・文化・観光をつなげようということと、生活に密着ということで、急いで話をする。数年前からミニ都をどりみたいなものを年間通してできないものか、本来の都をどりに吸収してできないかということを考えている。舞踊だけじゃなく、これは花街、観光ということにつながるわけで、どこかそれについて場所がないかということ、ここ1、2箇月、真剣に考えている。何かお知恵があったら是非おっしゃっていただきたい。芸妓、舞妓というものは、舞踊家と違い、お花というものが付いて回るので難しいのと、営業時間のことも難しいが、これは収益のあがる事業ではないかと思うので。

もう1点だけ景観の問題で。この度、都をどりで円通寺が出る。私も雪が降った時に円通寺を観に参って、久方振りだった。岩倉地域というのは、国際会館や宝ヶ池までは行くが、円通寺までは行かなかった。そうすると円通寺は参道みたいなものがなく、孤立したところだ。孤立した良さもあるだろうが、円通寺の借景を取り戻すのに、景観法を作っていただくのに、住職は20年程通われた。本当にちょっと周りが必要にも隔絶してしまっていて、これは勿体ない。市長がおっしゃるような、景観条例を崩しても、ホテルを建てるような発想は正しいと思う、正しいが、これは専門家に御覧いただかないと大変なことになるな、というふうに感じている。いろんなことを申して、すいません駆け足で。

<委員>

京都会館の話は、私は今初めて聞いたが、クラシック音楽にとっても京都会館というのは大変ひどいホールである。我々も、京都コンサートホールができてようやくほっとしたという感じだ。音響効果がひどいということだけではなしに、交通のアクセスが恐ろしく悪い。つまり、京都コンサートホールだったら、大阪、神戸、滋賀からいくらでも人は来ているはずだが、京都会館だったら、大阪、神戸の人は全然来ないだろうと思う。非常にアクセスが悪い。これは外に住んでいたときに痛感したことだ。いずれにせよ、京都コンサートホールが折角あるのに、バッティングするようなホールを作るのは愚の骨頂だということである。ただし、そう考えたときに、京都コンサートホールとの差異を明らかにするために何が残っているかと考えて、欧米系のもので言えば、オペラの話が出たりするのだなあ、と思ったが、これはもう滋賀とバッティングし、滋賀の方が遥かに魅力的なので、絶対にやめておくべきである。で、じゃあ残っているものと言えばマンモス・ホールになる。京都には、たとえばX JAPANとかEXILEとか、そういうものをやるようなホールは全然ないわけだから。結局、残っているパターンは馬鹿でかいホールになるわけだが、京都にそういうものが必要なのかどうか…。となると、非常に難しい話になってくる。慎重に考える必要があると、今、この場で思った。

で、そのことが一つと、前回と同じ質問だが、事業等々いろいろ見て、なるほどと思うことも多かったが、総じて質問したくなるのは、個々のプロジェクトについて、これは内側の人に親んでもらう機会を増やすためのものか、つまり、市民への文化的な還元なのか、それとももっと対外的にアピールすることを考えるプロジェクトなのかということだ。はっきりしないケースがわりと多い。両方が共存しているのはいいとは思いますが、これはこっち、これはこっちと、ぱっと見てある程度ははっきり分かる必要があるだろう。文化的に大変成功している街というのは、欧米には多い。私は最近仕事の都合でウィーンに頻繁に行くが、あの

街は 100 年間文化事業で食ってきているわけだ。彼らの文化都市としての演出の仕方のあざとさ、まあそこまでやるかという過剰さ、過剰サービス、過剰演出、音楽の都みたいなイメージをアピールするためだったら何でもする。端的に言えば、日本人の総監督を呼んできたりもするわけだ。見習うことは多々あると思うが、僕はそういうのを見る度に、京都は資源からいえば全然ウィーンと変わらないぐらいのものがあるのに、もう一つあざとさに欠けるな、ということに非常に思う。なので、僕は、基本的なことだが、すごく知りたいと思うのは、外国から来られた方のうち、お寺のようなもの以外が目当てで来ておられる方がどれくらいいるのだろうかということだ。能や狂言が観たい、この時にこんな催しがあるからといってその時に来た人がどれくらいいるか。あるいはその時にどんな不便を感じたか。恐らくいっぱい感じていると思う。ほかの、たとえばフィレンツェみたいところは滅茶苦茶サービスするから。京都では、何日に何があるのか、どこを見たらいいのかも分からない、みたいなことが多分あるだろうと思う。それから、パフォーミング・アーツのようなものを目的に来たわけではないが、来てみたらこんなものがあってよかったとか、そういう、どんな感想を持っているのかというデータを僕は知りたいなと。別に媚びろというわけではないが、そういうデータは参考にすべきであろうという気がする。駆け足ですがそんなところだ。

<委員>

今日、ざっと資料を見せていただいて、率直に思ったことを述べる。私は普段NPO法人で着付けやお茶、日本舞踊の体験を子どもや修学旅行生に見せるサービスをやっているが、国民文化祭のお話が今日いくつかあって、たとえば初めてのお茶とお香という事業がある一方で、私たちNPOも同じようなことをやっているのは非常に非効率的な感じがした。競合していくのもいいことなのかもしれないが、それに、私たちNPO法人がもっと京都市に積極的に働き掛ける必要はあるが、やはり、大きな文化芸術都市・京都の創生の中にNPOも入れてもらっているのもっと連携ができないかと思う。でないと、非効率的な活動しか、京都全体を考えたときにはあまりいい結果を生み出さないのではないかなと、まず一つ率直に感じた。NPOの立場として、今、この資料をぱっと見た感じでは、私たちが置いていかれているという感じがした。京都市では国民文化祭の事業がたくさんあって、一方、私たちは資金面や高齢化の問題で不安を感じながら活動しているので、私たちの問題もあるが、是非、支援をよろしくお願ひしたいということを感じた。率直な意見だ。

<会長>

こういうことこそ、先程、御意見で出ていた、うまくコーディネーターの役割を果たす存在がいればというふうに思う。同じことを別々にやって、だから片一方は無駄だ、とは必ずしも思わないが、しかし、一緒になれば有効なやり方ができるのにしないというのはやはりあるんだろうと思う。その辺りは人のつながりをどんどん持たれたらと思う。

ちょっと話にも出た子どものことだが、何か御意見はあるか。

<委員>

私も、いつも考えているのが、今の世の中、いろんなセーフティネットから漏れる人たちが出てきていて、それが社会不安の原因になっていたり、いろんな問題を起こしていると思う。特に若者でも、学校にいる間は先生、保護者も含めて、何くれと面倒を見てもらえるが、高校を卒業してその後就職もできない、いわゆるニートと言われる立場の人、仕事を探しても見つからない状況にある人って結構いる。大卒でもいるし、高卒でも。そういう人たちはもちろん仕事を探すのが第一だが、何となくそういう人たちに対する支援が弱いというのが今よく言われているところだ。行政側の都合で言うと、学校にいる間は教育委員会だが、

学校を出ると、声が届かなくなるというか。逆に若者の方もそっちにはあまり寄りつかないというのがあって、総合的な対応をしていこうということで行政の縦割りを排した取組に手がついたところで、文化の面でもそういう網からこぼれ落ちてしまっているような人たちに働きかけられるようなものが必要ではないかなと感じる。統合されて使われていない学校があれば、そこで勝手に集まって勝手に音楽をやったり絵を描いたり、若い人たちが自分たちで好きなことができるような場所があれば、居場所づくりにもなるだろうし、何らかの文化的な活動を通して、自分のやりたいことが分かってくるか、そういうような支援、直接ではないが、支援ができるのではないかなということを考えている。芸術センターは立派な素晴らしい施設だとは思いますが、あれは芸術という感じで、青少年活動センターというのがあるが、活動センターはお利口さんの行く所というイメージがあって、真面目というのか、多分、ニートのような人は、行くのに気後れを感じるんじゃないかと思うので。まあ若い人じゃなくて、中年の方とかでも、道に迷っておられる人、網からこぼれ落ちたような人って社会に結構たくさんおられると思うので、そういう人たちにも目を向けて、そういう人たちが利用できるような場ができればと思う。

<委員>

中間の査定、チェックということで資料を見ていた。当初立てておられるいろんな施策の中で、私、個人的には京都市の市民をどういうふうに芸術活動あるいは振興に巻きこんでいくかという、そういう施策のところに関心があり、これは資料の後ろの方になると思うが、結構いろんなことが書かれている。たとえば、32番「芸術家とメセナ企業との出会い促進」、これは未実施となっているが、このあたりのことであるとか、あるいは「芸術活動へのきめ細かな支援」、それから「関西の関係団体等と連携した広域的な情報発信の推進」だとか、こういうあたりを、もう少し具体的な内容でこれから進めていただく必要があるのではないかなと思う。

特に、今少しお話が出たが、市民そのものもそうだし、それから公的な形ではなしに、NPOとか、あるいは趣味的な形としての市民グループとか、たとえば映画とか現代美術とか、そういう同好の志としてまとまっている組織が、市内にも結構あると思う。そういうものも束ねられるような作戦というか、戦略が取れないのかなと思う。最初から申し上げていることだが、市民が責任を持って芸術に参加していくことが重要だ。現時点での見直しの条件を資料に整理していただいているが、たとえば文化芸術の存在感が増大というふうに書いてあるが、大阪市なんか惨憺たるもので、支援の費用というのが公的なところではかなり減少してきているという実情があるわけだ。それをどうして補っていくのかというあたりで市民の出番であるとか、あるいは企業、今、ロームの話が出たが、そういう資金調達、ファンディングみたいなものをどういうふうにして芸術振興に結び付けていくかということも、専門的な英知を生かしてこれから具体的な背策として整理をしていただければいいのではないかなと思う。

あと、断片的なことでは、施設運営の関係でも、特に現代美術なんかでは、なかなか京都へ回ってこないという感じがある。東京なんかで話題の新しい展覧会があると、次はたとえば金沢へ巡回するとか、名古屋の豊田、その後は四国の丸亀へ飛ぶとか、そういうものが結構多い。先端的な現代美術の展覧会は、関西は比較的弱いような感じがする。これは何故かと言うと、やはり施設運営の自由さというか、その辺にも原因があるのではないかなと思う。現状のこの各文化施設の門戸の開き方、新しい企画の取り入れ方とか、やはり少し見直しをしていく必要があるのではないかなと思う。

それから、むしろ民間で、市内のギャラリーや東京のギャラリーが中心になって、たとえば去年だと杉本家でアートフェアがあったりして、結構話題になった。そういうものを京都

市が中心になればもっと充実したものをやれるという可能性もあるわけだ。そういうところについては是非、今後、施策としての検討を進めていただけたらどうかと思っている。

ファンドレイジングなど、今日はおられないが、建皇委員など非常に詳しいと思うし、委員のお一人として私は期待を申し上げているところである。

それから、京都会館の話が出た。私は本来、建築をしておる者だが、京都会館は御承知のとおり前川國男先生の大傑作で、東京・上野の文化会館と京都会館、これは東西の双壁というような、建築の中ではそういう位置づけになっている。それをどう変えていくのかということについては、京都市の文化に対する見識も問われているということで、慎重な御検討をお願いしたいと思っている。

<委員>

国民文化祭のチラシを見て感じたが、いろんなイベントが様々な場所で展開されるような計画になっているが、バラバラな感じがする。統一感がないというか。各ジャンルがそれぞれで適当に勃発しているという感じがする。文化とは何かを市の職員さんが考えて思いついたイベントのような気がする。何か上滑りのような感じがして、観に行きたいとか、参加したいとかいう感じを受けない。なので、企業の方たち、それからアーティスト、そして市の人たちが一体化して、現実的などところで話し合っ、一つずつが独立するのではなく、関連して、一箇所で文化が炸裂するようなイベントをしたら、もっと魅力的になるんじゃないかなという気がする。

<会長>

国民文化祭というのはある種のパターンがあり、なかなかそれを変えていくのは難しい。それぞれの地域の人が自分もやる自分もやるということになると、結局全部やるということになってしまい、ある種のまとまりとか、テーマを立てることが難しくなってくるというふうなところがあるだろうと思う。京都ならではのものをということではいろいろ特徴は出しておられると思うが、おっしゃるような傾向というのは国民文化祭としてあると思う。段々具体的になっているから、どの程度、その御意見が取り込まれるか難しいとは思いますが、京都市として国民文化祭を盛り上げるに当たって、今のような御意見をとり込んでいただけたらと思う。

一とおりの御意見をいただいた。

こういうことをさらに具体的に検討をしていくためには、部会で細かいことをやっていく必要があるだろうという話がある。事務局から簡単に御説明いただけるか。

<事務局>

冒頭、事務局から御説明させていただいたとおり、短期間の中で論点を整理していくためには、審議会の下に部会を設けて委員を選任していただき、その方を中心にしたたたき台を作っていたらどうかと考えているので、そのあたりの人選をお願いしたい。

<会長>

では、池坊副会長と、富永委員いかがか。お二人は条例の策定の段階から深く関わっておられ、この創生計画についても一番よく御理解いただいていると思うので、このお二人を中心に部会を編成していただけたらどうかと思う。ときには外部の人も必要になってくるだろうと思うし、また、ここにおられる先生方にも個別にお伺いすることもあるだろうと思うが、部会の編成について御説明があれば。

<事務局>

では、会長の御指名どおり、池坊副会長と富永委員とを中心に、場合によっては外部の学識の方にも御意見をお伺いしながら、たたき台をまとめていきたいと思う。その点について、審議会委員の皆様にご了解いただければと思っている。

<会長>

今日のこの話し合い、別に結論があるというわけではないが、それぞれの御意見の趣旨を汲みとっていただき、部会の中で、取捨選択し、具体的にまとめていただけたらと思う。

副会長、最後に何か。

<副会長>

時間もあまりないので。

私は、計画取組状況の38番、それぞれの区づくり推進事業というところで、区役所が実行委員会を立ち上げてやっているかと思うが、その実行委員会のメンバーというのが固定化、高齢化をしていると思う。できれば、そういった中にも若い世代を入れて、新しい展開を目指していく必要もあるだろうと思う。地域づくりと文化事業というのは連動しているところもあると思うので。

それから、部会については、微力ではあるが、できるだけ皆様の御意見を反映した形で案を作っていきたいと思うので、どうぞよろしくご意見申し上げます。

<会長>

富永委員もよろしくお願ひしたい。

<委員>

私、会長から委員なのか委員でないのかとおっしゃられて、誠にそのとおりで複雑な立場でここに座っている。京都市を代表するのか、いや委員として好きなことを言えばいいのかといつも思っているが、今日はちょっと一個人として、京都市を離れて、考えていることを述べたいと思う。

皆さん御存知のように、私は民間から京都市に入ったもので、入っているいろんなことを感じている。そういう中で一番感じているのは、京都市は相当きめ細かくよくやっていると思うが、しかしそれが市民に伝わらないのは何故か、ということだ。これは、あれもやりますこれもやりますと、皆受けているからだと思う。で、予算でも薄く広がっている。だから市民に見えない。私、民間の会社にいた感覚では、効果発生の分岐点というものがあり、そこに達しない費用は皆切ってしまう。要するに選択と集中というのが徹底して行われるが、行政では切るというのが非常に難しく、なのでこういう審議会のお力を借りないとなかなかできないなということを感じている。これは文化だけではなくてすべての部門でのことだが、たとえば今年は100施策を今90%やっている、とかよく実績として発表される。そうじゃなくてもっと少なくてもいいから、これとこれだけは本当にできていると。文化で言えば、これを言うと仲間を裏切ったような形になるが、京響だけは日本一じゃなくて世界に羽ばたくようなものに育てるんだとか、あるいは美術館はルーヴルで7千万人も観光客が来るわけだから、ああいうものを目指すんだとか、絞ってやった方がよいと思う。本当は先程おっしゃったように文化と観光とか結びつくので、そうありたいというふうに、私これからも叫ぼうと思っているが、情けないかな、実情果たしていない。もう3年になり任期も残り少ないので、こういったことを少しでも実現していきたいと思う。社寺仏閣以外で文化のことで何人の方が訪れてきたのかという問いに答えられるようなことにもしたいなと考えている。

今日皆さんから大変よい，私もまったく同感という御意見をたくさんいただいたので，そういう御意見に対して，少しでも実のあるようにしていきたいと考えている。今日はどうもありがとうございました。

(以上)